
音読・朗読の技術を高めるための方法

会津大学短期大学部 社会福祉学科 特別講義講師
元小学校校長
渡部裕之

I. はじめに

国語科学習において、音読・朗読は広く行われている。だが、それは形式的であり、通り一遍であり、無反省のままに行われる傾向のようだ。また、概念規定もあいまいであり、したがって、音読・朗読の技術を踏まえた適切な音読・朗読力の向上のための方策もとられていないと言っても過言ではないだろう。

本研究は「音読・朗読の技能を高める指導」を基に、現行の学習指導要領に照らし合わせ、音読・朗読の技術に視点を当て、保幼小中の連携も踏まえて再度、構築したものである。

II. 音読・朗読の技術のポイント

広辞苑によると音読とは「声に出して読むこと」、朗読とは「読み方を工夫して趣のあるように読むこと」と記述されている。

学習指導要領解説国語編において、読むことにおける、音読は小学校低学年及び中学年において中心的な内容の一つとされている。高学年及び中学校第1学年では音読及び朗読が中心的な内容の一つとされる。また幼児教育においては、音読・朗読の前段階として、領域、言葉における絵本や物語の読み聞かせは位置づけられており、これは次の段階での指導に多大な影響を及ぼすものである。

1. 発音・音量・読む速さ

①発音

明確な発音やアクセントは日本語の語感を育てていくための根幹をなすものである。高学年になっても、・語尾を不必要にのばす、・発音が不明瞭、・無意味な抑揚をつける、・間がとれない、・鼻濁音がはっきりしない、などの児童が見受けられる。

②音量

声の大きさも大切要素である。声の大きさは大きすぎず、小さすぎず、教室の児童も一人一人にしっかり聞こえるというのが最低の条件である。・隅の席から対角線の端の席まで聞こえる声の大きさと読ませる。・性格などで声の大きさに個人差があるので録音・再生して聞かせ、自分の声量の実態を把握させ、遠い所にいる児童にも聞こえるように意識づ

けていく。

③読む速さ

小学校の学習読みとしての音読・朗読の速さとしては一分間に 250～300 字が適当であるといわれている。・読みの速さの基準は、聞き手の理解との関係で決まる。・基準とともに、個々の児童にあわせて考えていくことも大切である。・視聴覚機器の効果的な利用を図り、児童の読みの速さの感覚を育てるよう努める。

2. 充実した読解指導の展開

朗読は、ぎりぎりの読解・解釈の個性的表現であるといわれる。読解の浅い児童は、それなりの表現しかできず、作者の意図や主題までも深く理解した児童は、それなりの深さを朗読によって表現することになる。したがって、朗読は読解の結果の表現であると言える。

(1) 読解指導の過程で把握されておかなければならない事項

・教材の表現の特色、・叙述や描写のすぐれているところ、・会話と他の文との関係（修飾語や比喩の表現名詞止め、倒置法など）、・センテンスの長さ、・接続詞、指示語の正確な理解

(2) 教材選定の基準

・朗読そのものを単元とした教材、・情景や描写が適している教材、・会話と他の文が適している教材、・人柄の叙述が適している教材

III. 音読・朗読の技能を高める方法

1. 音読・朗読に必要な基礎能力

内容や感動に即して読む能力

①発音、アクセントに注意して読む能力、②記号、符号などに注意して読む能力、③速さや調子を考慮して読む能力、④語、文、文章の機能に応じて読む能力

2. 具体的な指導方法

①発音・発声の練習、誤読を直すなどの基礎練習。②読解を確実にするための指導法の工夫。③自己評価、相互評価の方法を取り入れる。例としては句読点に注意させるだけでも、読みがしまってくるし、また読みの速さも違ってくる。展開の段階で記号など教科書に書き込ませて注意させることも一方法である。

〈練習事例〉

1. 音読・朗読技術の基礎練習〈例 1～2 年生に必要とされるレベルの場合〉

1 正しい発音をしたり聞きわけたりする練習をする。特に拗音・促音・似ている発音の区別やアクセントなどに注意し、書写と並行して扱うのがよい。

2 フラッシュカード等を利用して拾い読みでなく、語や文として音読できるようにする練習をする。

3 役割りをきめて読み合うなど、会話文を気持ちをこめて読む練習をする。

4 みんなに聞こえる声の大きさをで読む練習をする。このような内容の基礎練習の成果が即国語の力となることが多いため、特に低学年を想定する場合、他の学年よりも多くの基礎練習をとりたい。

2. ラジオ放送（NHK）を用いた練習

NHK ラジオで放送されていた「ことばの教室」の「よくわかる読み方って？一音読」では、ねらいを事柄の意味が聞き手に伝わるように音読するとし、内容は（1）読み方が悪いと何のことかさっぱり内容がわからないという例として、一字一字読むとポッポッ読みとなり、句読点無視のただただ読み、妙な節のついたお経読み、ボソボソと読むと棒読みとなる。（2）テレビやラジオのニュースを読む人はどんなところに注意してニュースを読むのだろうといった内容のテキストを用いていた。

このように NHK 学校放送や、その他、補助教材などを年間計画、あるいは、週計画の中に組み入れて聴取し練習することも一つの方法である。

3. 教材を用いた練習

以前教材として使われていた「手ぶくろを買いに」（新美南吉）を使って、読みの速さ練習例を述べる。

ねらい：1 分間に 250 字位の音読の速さの感覚をもつようにする。

内容：

- 1 「手ぶくろを買いに」 P54－55 の約 500 字を音読する。
- 2 速く読みすぎる録音（1 分間 400 字）を聞き、読み方について考える。
（速さ、句読点、間など）
- 3 基準に近い録音（1 分間に 250 字）を聞き、考える。
- 4 両方の録音を使って、同時に再生させ、比べながら聞いて考える。
- 5 1 分間 250 字位をめあてに音読の練習をする。
- 6 基準に近い録音といっしょに音読の練習をする。

IV. おわりに

学習指導要領における音読・朗読の指導を系統的にみると幼児（幼稚園）の段階では絵本や物語を小学校 1～2 年までに語のまとまり、言葉の響き、正確に音読するとあり、3 年までに完成、3～4 年および 5～6 年までに伝わるように音読や朗読する。4 年段階は音読から朗読の重要な移行期であり、5～6 年の音読・朗読へとつながり、中学校段階へと発展していくのである。よって音読・朗読の系統を踏まえて、前項 2 で示しているねらい、内容等を確実に指導するとともにその定着を図らなければならないのである。音読・朗読による表現は、単なる技術的な指導にとどまることなく、読み取った内容やイメージをどう受け止めているのかの表現なのである。下学年の場合、拾い読み・読み誤り・脱落・発音・アクセント・語や文のまとまり・区切って読む・声の大きさ・読む速さなど正確に読むことが中心となる。一見すると音読・朗読の指導は技術的なもののように思われるが、

文章の内容を読み取るための基本技術を考慮して指導することが肝要であろう。

文献

- 桂聖編著（2011）『理論が身につく「考える音読」の授業』『考える音読』の会・東洋館。
厚生労働省（2008）『保育所保育指針』
厚生労働省編 2008『保育所保育指針解説書』
文部科学省（2008）『幼稚園教育要領』
文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』
文部科学省（2008）『小学校学習指導要領』、
文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説国語編』
文部科学省（2008）『中学校学習指導要領』
文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説国語編』
新村出編（2008）『広辞苑』（第6版）、岩波書店。
渡部裕之（1982）「音読・朗読の技能を高める指導」『福島県教育センター所報ふくしま』
59号，pp.5-7.